

アル=アンダルスとファーティマ朝： 貨幣学からの証言¹⁾

カロリーナ・ドメネク=ベルダ

(アリカンテ大学 考古学・歴史遺産研究センター教授)

阿 部 俊 大 訳

要約：この論考は、アル=アンダルス [中世のイスラーム=スペイン] におけるファーティマ朝 (909-1171 年) の貨幣の存在について、アンダルスの領域におけるこの外国貨幣の流通についての情報を見直し、アップデートしつつ、論じたものである。近年、イベリア半島において見出されたファーティマ朝貨幣の発見貨は、個別発見貨も、一括出土貨も数多くある。ここでは、ファーティマ朝貨幣が後ウマイヤ朝 (756-1031 年) の貨幣と共に様々な割合で現れるが、もっぱらファーティマ朝貨幣だけから成る一括出土貨は極めて珍しい。これらの発見貨は、主に2つの地域に集中している。グアダルキビル河流域と地中海沿岸である。これらの地域では、組成金属 [金貨か銀貨か] と年代によって、発見貨群 [の量や形態] に動的な変化が見出される。これらの発見貨の総合的な分析によって、これらの貨幣が流通していたルートやその普及度合いを知ること、またアル=アンダルスへのファーティマ朝貨幣の到来という現象を年代的に限定することが可能になる。

キーワード：貨幣学 イスラーム アル=アンダルス 北アフリカ ファーティマ朝 ターフ諸国 貨幣流通

イントロダクション

アル=アンダルスの後ウマイヤ朝のカリフ国と北アフリカのファーティマ朝の間の対立にも関わらず、発見貨群からは、この北アフリカの王朝が

鑄造した貨幣が、その形態においても銘文が示すメッセージにおいても明らかに異なっている。在地で発行された貨幣と混じりつつ、アンダルスの領域を流通していたことが明らかになっている。発見貨群の分析から、それらはアンダルスの幾つかの領域で日常的な通貨として使われていた外国貨幣であったと推測される。それらの構成、地域分布、それが出土した地帯の貨幣の動態などが、アル=アンダルスにおけるこのファーティマ朝の貨幣の存在の問題に取り組み、またこの現象を年代的に限定することを可能にしてくれる。

アル=アンダルスにおけるファーティマ朝貨幣の存在は古くから知られており、近年、特に注目されている。このことは1915年にプリエト A. Prieto によって示された。彼はグアダルキビル河の発見貨について発表するに際し、ファーティマ朝の貨幣に言及しつつ、「それほど我々の関心を引かないが、ロンドン、パリ、そしてとりわけパレルモにおけるそれらの良質なコレクションの存在を考慮に入れば、より興味深いものとなるだろう」と述べた (Prieto 1915, p.311)。ファーティマ朝の貨幣の数的重要性が明らかになり、イベリアの多くの発見貨群におけるその存在が確認されるにつれて、この当初の無関心は姿を消していった。同じプリエトは、何年も後に、「極めて貴重なコレクション」を作る機会が失われたことを悔やんでいる (Prieto 1934, pp.300-301)。1950年代と60年代には、ナバスケス J. M. de Navascués がファーティマ朝の貨幣を含む多くの一括出土貨について発表し²⁾、その後の数十年に、その他の一括出土貨も幾つか加えられた。しかし、アル=アンダルスにおいて発見されたファーティマ朝の貨幣を専門的に扱った最初の研究が現れるのは、1990年代を待たねばならない。マルティネス・サルバドール C. Martínez Salvador (1990) が、ファーティマ朝の貨幣を含むアンダルスの埋蔵物 (当時、総計11) を扱った論考である。当時から現在までにその数はかなり増えている³⁾。古く

から知られていた幾つかの一括出土貨⁴⁾の再検討と、近年明るみに出た、新しい発見貨群——ムルシアのハボネリアス Jabonerías や、バレンシアのサンタ=エレナ Santa Elena やコンスティトゥション Constitución におけるように、非常に量が多いものもある——は、我々に新しい検討材料を提供しており、既知のものと合わせて、ファーティマ朝貨幣の貨幣学的なパノラマとそのアル=アンダルスとの関係について、全体的なヴィジョンを提示することを可能にしている。

発見貨幣群とその構成

現在のところ、アンダルスの領域において 70 以上の、ファーティマ朝の貨幣を含む発見貨群が知られている (図 1)。多くの場合、偶然に遺失された、孤立した貨幣群もあれば、数百に達することもある、多様な数の貨幣で構成される埋蔵貨幣群もある。それぞれについて、我々が有する情報は非常に不均等である。孤立した貨幣群は、常に発見されるわけではないし、各地域で実施された調査量によって非常に変化しやすく⁵⁾、その一方で、一括出土貨もしくは埋蔵貨は、貨幣学の文献に組織的に所収されているためである。

ファーティマ朝貨幣の発見貨は、基本的に 2 つの大きなエリアに分かれて分布している。1 つはグアダルキビル河の流域で、首都コルドバとその周辺に特に集中している。既知の発見貨群の量においても、それらが含む貨幣の数においても集中している。もう 1 つはバレアレス諸島を含む、エプロ河以南の地中海沿岸である。双方のエリアは、それぞれの既知の証拠が解明するところでは、ファーティマ朝の貨幣発行の変動に関する、重要な相違を示している。

1 枚か 2 枚の貨幣から成る孤立した発見貨の大部分が、地中海沿岸で見

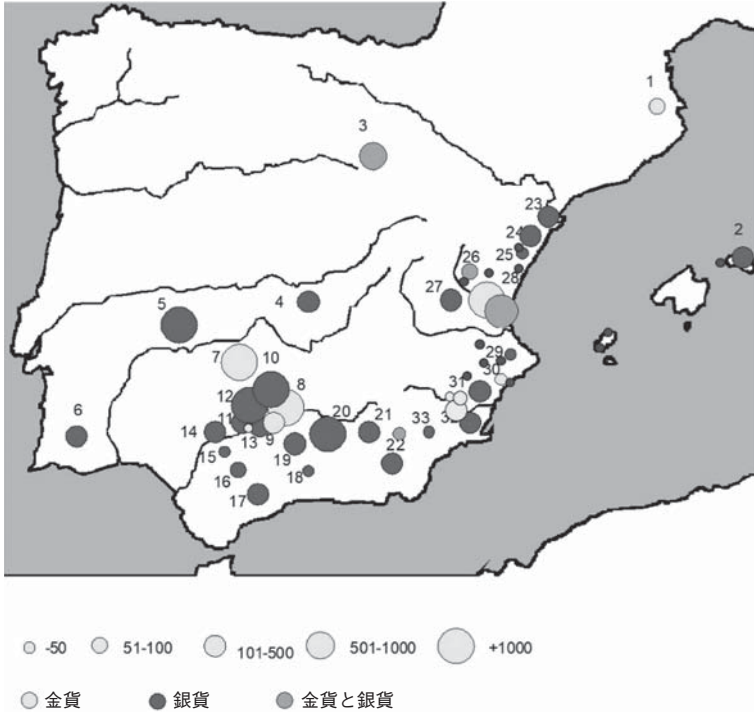


図1 アル=アンダルスにおけるファーティマ朝貨幣の発見貨

つかっている。そこでは博物館や公的・私的なコレクションの収蔵物の徹底的な精査が行われたからである。この種の作業を他のエリア、例えばグアダルキビル溪谷で行うことで、間違いなく、かなり多くのこれらの貨幣が見出されるであろう。そのため現状では、ファーティマ朝貨幣の孤立発見貨の地図は、状況をよく反映しているとは言えない。東部海岸への偏りが明らかだからである。これらの孤立した発見貨は通常、偶然失われたものであり、多くの場合、低額貨幣や銀貨である⁶⁾。これらの偶然失われた貨幣は、おそらく北アフリカからやってきた旅人や、シーア派の信者がもたらしたものであろう⁷⁾。我々が知る、最も年代が新しいファーティマ朝の貨幣の孤立発見貨は、アル=ザーヒル（ヒジュラ暦411-427年／西暦

1021-1036年)が発行したものである。今のところ、彼の後継者であるアル=ムスタンスィル(ヒジュラ暦427-487年/西暦1036-1094年)の貨幣は、秘蔵されたものしか見つかっていない。

遺失貨幣の発見貨と対照的に、一般に埋蔵貨として知られている一括出土貨は、これまでに発見されていることが多く、徹底的に精査されていないとしても、少なくとも貨幣学の文献で言及されており、そのためこれらの貨幣を調べることで、アル=アンダルスにおけるファーティマ朝の貨幣の存在について、より現実的なパノラマを提示しうる。

これらの一括出土貨幣の多くは、一種類の金属の貨幣で構成されている。銀の一括出土貨は金のそれより多い。これら2つの金属が同じ発見貨群の中で記録されているのは、ソリアのシウエラ Cihuela, シナルカス Sinarcas のラス=スエルテス Las Suertes, アルメリアのアルカイデ川 Río Alcaide とバレンシアのコンスティトゥションの4例だけである。

ファーティマ朝の貨幣だけで構成されている秘匿貨幣群が見つかることは多くない。逆に、後ウマイヤ朝の貨幣やターイファ[(後ウマイヤ朝分裂後の)イスラーム小王国(群)]時代の貨幣と一緒に現れるのが普通で、ファーティマ朝の貨幣だけから成る一括出土貨は2つだけである。1つはベニドルムで発見され、17枚の金貨で構成されている(Doménec 2003, pp.62-63)。もう1つはメノルカ島のミッチジョルン=グラン Migjorn Gran で発見された300枚前後の銀貨で、古い記述によって、ごく部分的に知られているのみである(Moll 1997)。この2つだけが、ファーティマ朝の貨幣がアンダルスの貨幣を伴っていないと思われる事例である。

ファーティマ朝の貨幣が含まれる一括出土貨の規模は、非常に多様である。6枚だけのロハ Loja のような小規模の埋蔵貨幣の場合から、トルヒーリョ Trujillo やアサ=デル=カルメン Haza del Carmen のような、何千枚もの貨幣の大規模な埋蔵貨の場合もある。とはいえ、埋蔵の規模とそれ

が含むファーティマ朝の貨幣の量に関係性は見られない。例えば、コルドバ地方のフォンタナル=デ=カバノス Fontanar de Cabanos の一括出土貨では、3632枚の完全なカリフのデイルハム銀貨と大量の断片が含まれるが、1枚のみがファーティマ朝の貨幣である。その一方で、フォン=デ=ラ=ベカ Font de la Beca のように、166枚の貨幣のうち、80枚がファーティマ朝の場合もある。ベガストリ Begastri では237枚中208枚である。ファーティマ朝貨幣の割合はそれぞれの一括出土貨でかなり異なっており、金属の役割に対する異なる態度や、それが現れた地理的範囲や年代などを観察することができる。

金の保管物については、ファーティマ朝の貨幣が一括出土貨全体の中で高い割合を占めていたと考えられる。コルドバのクルス=コンデ Cruz Conde やグアダルキビル河の一括出土貨では、ほぼ半分を占めている。イベリア半島東南部では、割合はこれほど高くない。とはいえ高くはあり、30%から40%で、(アンダルスの領域で唯一、全てがファーティマ朝の金貨であるベニドルムの発見貨群を含む)ハボネリアスの事例では65%に達する。銀貨の一括出土貨では、その割合はかなり下がる。また、地域による偏差も認められる。この場合は金の埋蔵貨と逆である。グアダルキビル溪谷では10%に達することは少なく、地中海沿岸では通常、この数値より高くなる。フォン=デ=ラ=ベカの一括出土貨では48%、エルチェ Elche のケースでは83%、ベガストリの事例では87%に達している。

このように、埋蔵されたファーティマ朝の貨幣が後ウマイヤ朝貨幣やタイファ諸国の貨幣と一緒に現れる事実は、この外国貨幣が経済的取引において用いられていたことを示しているように思われる。おそらく、国家行政とは無関係であろう。例えば、ライバルである王朝が造幣した貨幣で税を納めることなどは認められなかったであろうし。いずれにせよ、疑いなく、ファーティマ朝の貨幣はアル=アンダルスで流通していたのであ

る。埋蔵貨の多くが基本的にその他の貨幣と現れるという事実は、それらが通貨として機能し、単に貴金属として貯蔵されたのではないことを示していよう。エルミタ=ヌエバ Ermita Nueva やロハ、ロルカ Lorca やベガストリにおけるような、ファーティマ朝の貨幣が宝石やその他の金属の品と現れた一括出土貨の場合のみ、単純に貴金属としての価値によって貯蔵されたと考えられるだろう。

これらの北アフリカの貨幣が、後ウマイヤ朝の貨幣と同じ扱い、同じタイプの改変を受けているという事実から、ファーティマ朝の貨幣の使用法は、アンダルスの貨幣のそれと同じであったと思われる。ファーティマ朝の貨幣は、後ウマイヤ朝の貨幣と同様、時に断片化、切断、穴開けなど、幾つかのタイプの改変の対象となった。断片の存在は、特に銀貨では、大変よく見られる。トルヒーリョの埋蔵貨やロス=ロサーレス=トシーナ Los Rosales-Tocina の埋蔵貨のように、ファーティマ朝の貨幣全てが断片となっている事例すら存在している。切断も珍しくなく、多くの貨幣に行われている。穴の開けられたアンダルス貨幣が現れる一括出土貨の場合、ファーティマ朝の貨幣もまた穴が開けられていることが多い。穴開けはそれぞれの貨幣で同じように行われている。アルモラディ Almoradí の、ロラ=デル=リオ Lora del Rio の発見貨の事例では、45%の貨幣が穴を開けられていて、その中には2枚のファーティマ朝貨幣が含まれている。サンタ=オラージャ Santa Olalla の発見貨群では、全ての貨幣が、一枚だけのファーティマ朝の貨幣も含め、穴が開けられている⁸⁾。トーレブヒーリャ Torrebuffilla の事例のように、孤立した発見貨でも、穴が開けられていたこともある。

このような改変、特に穴開けは、一般に、金貨よりも銀貨に対して行われる。この違いはおそらく、それぞれの金属のファーティマ朝貨幣のアル=アンダルスにおける流通において認められる、時系列的な差異によって

説明できるだろう。アル=アンダルスで発見されるファーティマ朝の金貨の多くは11世紀に造幣されたものであり、そのため、アル=アンダルスが小さなターイファ諸国に分断されていたときにイベリア半島に到来している。この時期には、11世紀初頭の内乱の時期にピークに達していた(Canto 1986, pp.353-355)、貨幣に穴を開ける習慣は減少していた。抗争が過ぎると、貨幣を管理するために穴を開ける必要は減少したのだろう。そのため、ファーティマ朝の金貨で穴が開けられたものは非常に少ない。合計735枚のファーティマ朝貨幣のうち、3枚にしか穴が開けられていない、サンタ・エレナの発見貨の事例が有名である⁹⁾。この発見貨では、貨幣の断片も非常に少なく、13点だけが確認されている。この13のうち9点は貨幣の半分かそれ以上であり、銀貨では非常によくある、より小さい断片は欠如している¹⁰⁾。それぞれの金属の発行貨幣が示す差異は、貨幣の改変や、流通の時系列的範囲の違いに留まらない。アンダルスの領域における貨幣の所在や、各地域における貨幣の動態のような、他の側面にもまた関わっている。

発見貨群の時系列的な変容

10世紀と11世紀で、アル=アンダルスに到来したファーティマ朝貨幣の全体量には相当な量的差異が存在する(図2)。アンダルスの領域において知られているファーティマ朝貨幣の最初のもは、ファーティマ朝の初代カリフのウバイドゥッラー(ヒジュラ暦296-322年/西暦909-934年)が発行したものである。アル=アンダルスでは、まだコルドバの[後ウマイヤ朝の]コントロールを逃れている地帯が残っている時期であった。次のカリフのアル=カーイムの在位期に含まれる年代的空白を挟んで、疑わしいながら[次のカリフの]アル=マンスールのもととされる2点の

貨幣がある。1つはムナスティル=ダ=キャンプ Monestir de Camps のムラービト朝（1040-1147年）の一括出土貨から見つかったディーナール金貨である。銘文の変化から、キリスト教徒による模倣ではないかと考えられる（Balaguer 1990, pp.105-106）。もう1つはメノルカ島のミッチジョルン=グランの一括出土貨に含まれていた¹¹⁾。

アル=ムイッズ（ヒジュラ暦 341-365年／西暦 953-975年）の発行した貨幣から、発見貨の量がやや増加し始める。しかし、銀貨の場合は、全てが11世紀初めの埋蔵貨の一部として現れていることに留意しなければならない。他方で、金貨の場合はさらに遅い時期の一括出土貨から現れている。ターイファ期か、ムナスティル=ダ=キャンプの事例のようなムラービト期のことまでである。コルドバのクルス=コンデやバレンシアのサンタ=エレナのような、これらの金貨の一括出土貨において、アル=ムイッズの貨幣

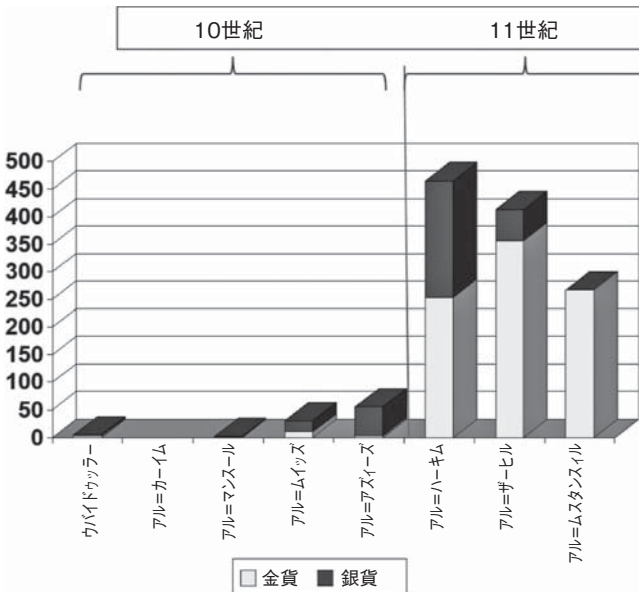


図2 カリフごとの、アル=アンダルスにおけるファーティマ朝の貨幣

はごく少量しか出ていない。しかし割合はほぼ同じである。一括出土貨全体の0.4%で、どちらの場合もファーティマ朝の貨幣の1%前後である。

アル=アズィーズ [975-996年] が発行した銀貨は、それまでのカリフのものより多く現れ、17の一括出土貨とメノルカ島の孤立した発見貨の中に姿を現している。にも関わらず、金貨はごくわずかで、先に言及したクルス=コンデヤムナスティル=ダ=カンブ、サンタ=エレナなどの一括出土貨の中で、常にアル=ムイZZの貨幣と一緒に現れている。ただし、この最後のものでは割合はずっと低い。

アル=ハーキム [996-1021年] は最も多く [の貨幣が] 現れるカリフである。彼の貨幣は、事実上、多くの一括出土貨のどこにも現れ、さらに、割合も非常に高い。多くの事例で、埋蔵貨中のファーティマ朝貨幣の半分以上で、コルドバの国立考古学博物館のような既知の事例では80%に達し、エルチェの事例では89%に達している。アンダルシア地方 [スペイン南部、現在のアンダルシア自治州に相当] では、既知の全てのファーティマ朝貨幣のうち、アル=ハーキムの発行貨幣が67%以上であると推測される。彼はグアダルキビル地方で銀貨が発見される最後のカリフである (図3)。彼の発行した貨幣の後、[ファーティマ朝の] 銀貨はアンダルシア地方には到来しなくなり、彼の後継者たちが発行した貨幣は金貨のみが、それもより少ない量で受け入れられた。その間、地中海沿岸では、彼の息子アル=ザーヒルの治世においても銀貨が到来し続けていた (図4)。

アル=ザーヒル [1021-1036年] の治世を通じ、アル=アンダルスに到来するファーティマ朝の貨幣の量は減少を始める¹²⁾。しかし、金属ごとに非常に異なった動向が見て取れる。金は前任者よりも多いのに対し、銀はドラスティックに減少し、グアダルキビル渓谷では消失するほどであった。アル=ムスタンスィル [1036-1094年] は、その貨幣がアル=アンダルスを流通した最後のファーティマ朝のカリフである。この頃には、銀貨はアン

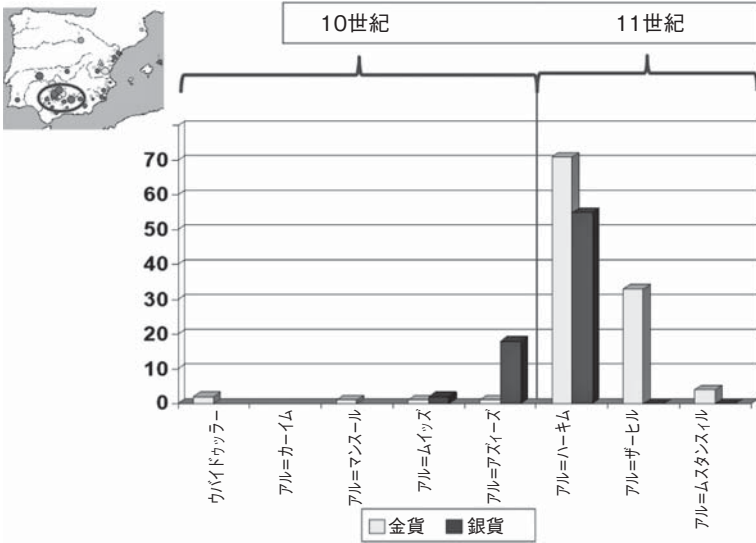


図3 カリフごとの、グアダルキビル渓谷におけるファーティマ朝の貨幣

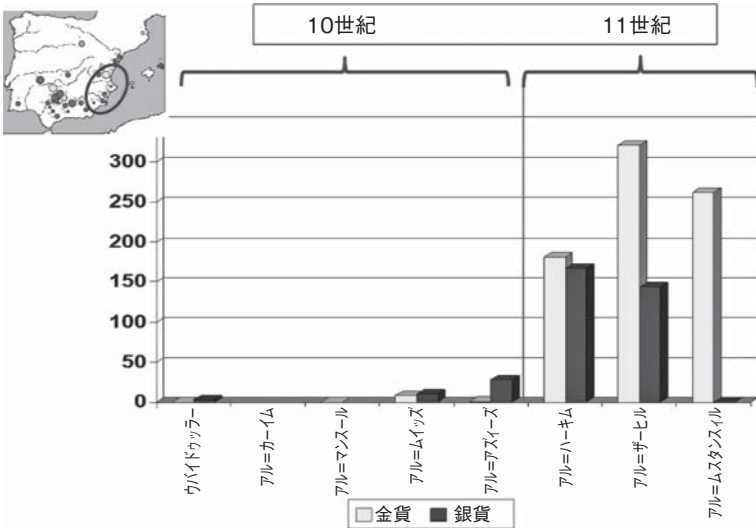


図4 カリフごとの、イベリア半島南東部におけるファーティマ朝の貨幣

ダルスに到来しなくなっており、金貨のみが知られている。その大部分は地中海沿岸部、とりわけ、このカリフの貨幣を相当量含む、ハボネリアスとサンタ=エレナの一括出土貨に由来している。

アル=アンダルスにおけるファーティマ朝金貨の流通

ファーティマ朝の金貨は、基本的にイベリア半島東南部とコルドバ周辺に集中して発見されている（図5）。現在のところ、金貨の証拠はバレアレス諸島では見つかっていない。アル=アンダルスへこの貨幣が入る中継点となったはずなのだが。しかし、より北方、ジローナのムナスティル=ダ=キャンプや、ソリア県のシウエラの一括出土貨では見つまっている。この2つの埋蔵貨は、その構成と年代に幾つの特徴がある。前者は、ファーティマ朝の貨幣がムラービト朝の貨幣と共に埋蔵されていた、既知の唯一の事例である¹³⁾。また、この事例におけるように、12世紀のファーティマ朝の貨幣が含まれているのも普通ではない。このムナスティル=ダ=キャンプのファーティマ朝の一括出土貨は、広い時間的範囲に及んでいる。アル=マンズール（ヒジュラ暦334-341年／西暦945-953年）のものとする1枚の貨幣から¹⁴⁾、西暦1101年のカリフのアル=ムスタアリーの発行とされる貨幣までで、全ての一括出土貨が埋蔵された日付はヒジュラ暦512年／西暦1119年である（Balaguer, 1990, pp.105-106）。シウエラの埋蔵物もまた、ファーティマ朝の貨幣については特徴的である。第一に、2種類の金属の貨幣から成る、数少ない既知の埋蔵貨の1つである。ファーティマ朝の貨幣も2種類の金属から成り、1/4ディーナール金貨を1枚と、銀貨5枚を含んでいる。また、前者と同様に、こちらも広い時間的範囲を示しており、アル=マフディー（ウバイドゥッラー）の名におけるヒジュラ暦297年／西暦909年の発行貨から、ヒジュラ暦567年／西暦



図5 アル=アンダルスにおけるファーティマ朝金貨の発見貨

1172年までである (Navascués, 1961, p.174)¹⁵⁾。

金貨を含む発見貨の構成は、少額の貨幣が好まれる傾向を明らかにしている。ディーナール金貨を損なって作られた ruba'as, つまり 1/4 ディーナール金貨が明らかに多く、ディーナール金貨はずっと少ない (図6)。ディーナール金貨は、ムナスティル=ダ=キャンプやシナルカス、ベニドルムやサンタ=エレナ¹⁶⁾、ハボネリアスの一括出土貨幣の中に現れている。これらはすべて地中海地方である。そこに、アンダルシア地方で現れた唯一の事例である、コルドバで鉄道工事の際に発見された2枚のディーナール金貨が加わる。その他のコルドバのファーティマ朝金貨は、ディーナール金貨の断片だと考えられている¹⁷⁾。シウエラの発見貨群や、バレンシアのコンステイトゥション通りの一括出土貨でも、1枚の ruba'a (1/4 ディー

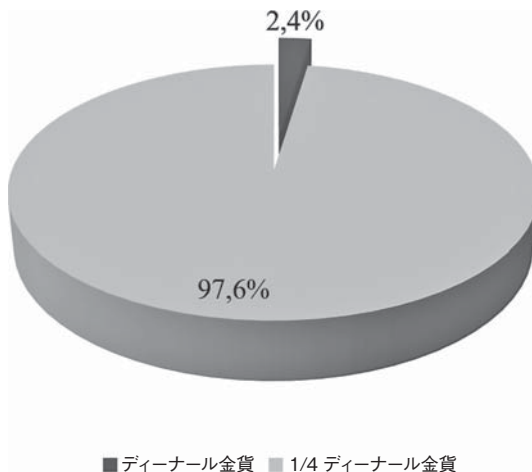


図6 アル=アンダルスで発見されたファーティマ朝金貨の種類ごとの割合

ナール) 貨が唯一のファーティマ朝の金貨である。ベニドルムの一括出土貨では、16点の1/4 ディーナール金貨と1枚だけディーナール金貨が含まれ、ハボネリアスではファーティマ朝の貨幣はすべて1/4 ディーナールである。サンタ=エレナの一括出土貨では、1/4 ディーナール貨幣がファーティマ朝の貨幣の90%以上を占め、完全な1 ディーナール金貨は9%に達していない。その上、アル=アンダルスで発見されたファーティマ朝金貨が大きく集中しているこの重要なサンタ=エレナの埋蔵貨の分析の結果は、少なくともこの埋蔵貨においては、ディーナール金貨の割合がアル=ハーキムの治世 [996-1021年] 以降、次第に減少していることを明らかにしている。発見貨群において、彼の名前を持つディーナール金貨はほぼ19%に達するが、彼の後継者であるアル=ザーヒルのものは9%に減少し、アル=ムスタンスィルのものは2%にまで低下する。従って、アル=アンダルスにおいては、流通していたファーティマ朝の金貨は基本的に1/4 ディーナール金貨であった。この貨幣は、それが特に同列に並べられたであろう、タイファ諸王国の発行した貨幣に、度量衡学的にずっと近いも

のであった。

アル=アンダルスにおけるファーティマ朝の金貨の流通年代については、発見貨群の構成の分析から、この現象が基本的に11世紀に限定されることが明らかに見て取れる。カリフ期〔※ここでは10世紀を指していると思われる〕には、アル=アンダルスにおけるファーティマ朝金貨の存在は極めて乏しい(図2)。貨幣群の発行の日付の研究は、およそ1.8%しかこの時期に対応していないことを示している。多くの貨幣が、11世紀か、場合によってはもっと後の時代の埋蔵貨の一部として現れたことを考慮に入れるなら、この小さい数値はさらに小さくなるだろう¹⁸⁾。アル=マフディー(ウバイドゥッラー。ヒジュラ暦297-322年/西暦910-934年)の名がある2枚のディーナール貨——コルドバで鉄道工事の際に発見され、既知のものではイベリア半島最古——の事例を除けば、それ以外の10世紀に造幣されたファーティマ朝金貨は11世紀のコンテクストにおいて現れている。つまり、より後の時代の貨幣と共に、ごくわずかな割合で埋蔵されていた。非常に疑わしい1枚の貨幣だけが彼のものとされている、カリフのアル=マンスール(ヒジュラ暦334-341年/西暦945-953年)の事例において、そのような事態が生じている¹⁹⁾。彼の後継者たち、アル=ムイッズとアル=アズィーズについては、クルス=コンデとサンタ=エレナの埋蔵貨における貨幣群が知られており、ムナスティル・ダ・キャンプの埋蔵貨からも現れている。そのため、銀貨に起きたのとは反対に、ファーティマ朝のカリフたちによって造幣された金貨はウマイヤ朝のディーナール金貨と競合せず、10世紀には実質的にアル=アンダルスに存在しなかったこと、その一方で、ターイファ諸国の時期には容易にイベリア半島に到来していたことが断言できる。

11世紀には、まさにカリフのディーナール金貨が姿を消すその瞬間に、

ファーティマ朝金貨がアル=アンダルスで大量に出現する (Canto 2002, p.18)。11世紀全体を含む、アル=ハーキム (ヒジュラ暦 386-411 年／西暦 996-1021 年)、アル=ザーヒルとアル=ムスタンスィルによる発行貨幣は、実質的に、発見貨群すべてに現れている。もっとも多く現れているカリフは——シチリア島において彼の死後、彼の後継者アル=ムスタンスィルの治世初期に行われた、彼の名前での発行を計算に入れなくても——アル=ザーヒルである。このような死後に発行された貨幣は、サンタ=エレナやグアダルキビル河、シウエラの一括出土貨から現れている。シウエラでは、発見貨中の唯一のファーティマ朝の金貨がまさに、アル=ザーヒルの名においてシチリアで彼の死後に発行された、1/4 ディーナール貨である (Sáenz-Díez 1991, p.241)。

アル=アンダルスで発見されたファーティマ朝の金貨の大部分は、既に同王朝が完全にエジプトに根付いた時期に発行されたものなのだが、エジプトの造幣所で作られた貨幣は非常に少ない。マルティネス=サルバドール (1990, p.139) が指摘しているように、それらはこの時期にもっとも活動的であったはずなのだが。アル=ムスタンスィルの治世に発行された貨幣はアル=アンダルスで発見されたもの全体の 21.56% にあたること、また彼の治世には西部の造幣所群が貨幣を製造していなかったことを考慮すると、エジプトの貨幣の欠如がより明白になる。反対に、金貨の多くは西部の造幣所群、アル=マフディーヤ al-Mahdiyya, アタラーブルス Aṭarābulus, アル=マンスリーヤ al-Manṣūrīya からもたらされ、特にシチリアの造幣所は、もっとも多くのファーティマ朝貨幣をアル=アンダルスへもたらしていた (図7)。グアダルキビル河のコルドバで発見された、2000 枚近くのファーティマ朝貨幣の多くがシチリアから来たものであり、バレンシアのサンタ=エレナの貨幣の 67% 以上、またムルシアのハボネリアスの貨

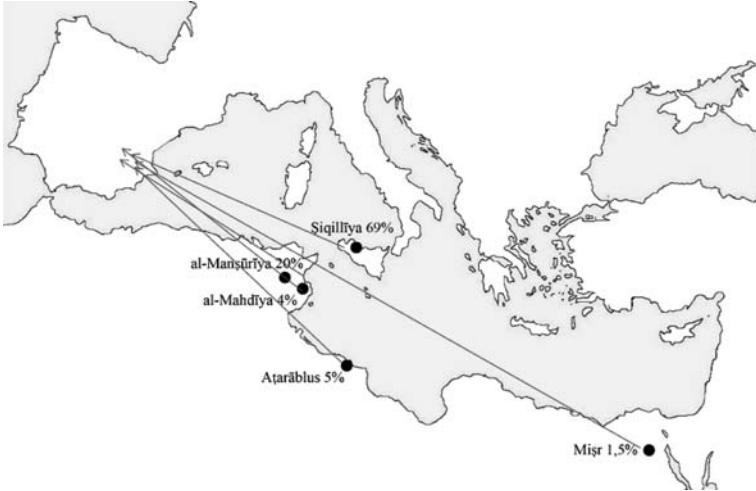


図7 アル=アンダルスで発見されたファーティマ朝貨幣が造られた造幣所

幣の82%がそうであった。貨幣の出所についての、これら3つの一括出土貨群の類似は顕著であり、アル=ムスタンスィルの時代にはシチリア島はもはやファーティマ朝の直接のコントロールの下にはなかったのに、シチリアの造幣所は彼の名前で多くの貨幣を造幣し続けていたことを示している。

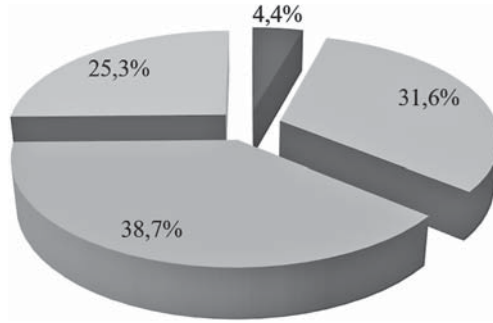
銀 貨

ファーティマ朝の銀貨の発見貨は、金貨より地理的により広範囲に広がっており、ポルトガルのアルガルベ地方でさえ見つかっている。ファーティマ朝の銀貨の発行は、金貨よりも少なかったのだが、10世紀にはアル=アンダルスに金貨以上の量で到来している。最初のカリフのウバイドゥッラーの銀貨も含まれ、すべてイベリア半島南部で見つかっている。バルセロ Barceló (1984, 註28)によると、イビサ島でアブ=ターヒル=イス

マール=アル=マンズール（ヒジュラ暦 334-341 年／西暦 945-953 年）のものとする銀貨 1 枚があり、アル=アンダルスで発見されたこのカリフの唯一の銀貨である²⁰。彼の後継者たちが発行したファーティマ朝の銀貨も、10 世紀を通じて目立たずに到来し続け、アル=ハーキムの治世（ヒジュラ暦 386-411 年／西暦 996-1021 年）にピークに達する。コルドバのカリフ国が完全なフィトナ（内戦）へと分解していく間に発行された貨幣群である。グアダルキビル地域では、彼の貨幣が、到来した最後のファーティマ朝銀貨である（図 3）。他方で、地中海沿岸では銀貨の流入はより長く、アル=ザーヒルの治世（ヒジュラ暦 411-427 年／西暦 1021-1036 年）の間も維持された（図 4）が、アル=ムスタンスィルの治世には完全に姿を消した。このカリフについては、アンダルシア地方では金貨しか知られていない。

アル=アンダルスに到来したファーティマ朝の銀貨はすべて西部の造幣所で作られたものであり、その多くはアル=マンズリーヤの造幣所のもので、その割合は 95% に達する。とはいえ、造幣所群について我々が有している知識は非常に部分的なものであることを忘れてはならない。研究文献に書かれていなかったり——時に、ただ単にファーティマ朝の貨幣の存在が述べられるだけで、詳しい情報が示されなかったりする——、貨幣から消えていたり——銀貨ではとてもよくあることである——して、多くの場合、失われているデータだからである。

また、貨幣の種類について言及している、情報の少なさも考慮に入れられる。貨幣が破り、多くの場合、不規則な断片の形で我々のもとに伝来することになる切断のために、その度量衡は非常に変化しており、そのため、どの種類の貨幣のものか、決定することは容易ではない。類型学的な調査も大きな助けにはならない。同じ型でも様々な価値において使われているからである。そのため貨幣の重量に頼らざるを得ないが、多くの留保



■ 1ディルハム銀貨 ■ 1/2 ディルハム銀貨 ■ 1/4 ディルハム銀貨 ■ 1/8 ディルハム銀貨

図8 種類ごとのファーティマ朝銀貨

が必要である。多くの場合、切断や断片化によって〔重量は〕変化しているからである。とはいえ、これらすべての問題点に配慮した上であれば、既に他の研究者たちが記したことを確認する、幾つかの一般的な考察をすることは可能である。金貨で生じたのと同様に、発見貨群の中の銀貨の種類も、1つのものが優位を占めるのではなく、多様であり、ファーティマ朝の領土で起きたのと同様に、特に1/4ディルハムと1/2ディルハムである。また、エルチェの発見貨群から出てきた1/8ディルハムの一括出土貨も考慮しなければならない。現在のところ、より小さい1/16ディルハムに相当する断片は知られていない（図8）。

結 論

アル=アンダルスにおけるファーティマ朝貨幣の発見貨群の貨幣学的証拠は、遺失貨幣も、また埋蔵された貨幣も、ファーティマ朝国家とアル=アンダルスの関係について、興味深い歴史的質問を提起することを可能にしてくれる。発見貨群の分析から、一連の結論を引き出すことが出来る。

第一に、異なる流通動向を示す、2つの金属の間の本質的な違いが看取される。ファーティマ朝カリフ国は、銀貨より金貨を多く造幣したことが知られているが、その金貨は11世紀まで、大量にアル=アンダルスに到来することはなかった。アル=アンダルスで見出された最も古いファーティマ朝の貨幣は、10世紀初めに初代のカリフ、ウバイドゥッラー=アル=マフディーが発行したものである。この世紀を通じ、アル=アンダルスにおけるファーティマ朝貨幣の存在は非常に少なかった。非常に少量で、基本的に銀貨であった。ファーティマ朝の金貨は10世紀のアル=アンダルスでは流通せず、ターイファの時代に、基本的にシチリアを通じて、到来し始めた。銀貨の方は、反対の動向を示す。銀貨は、後ウマイヤ朝カリフの時代には金貨より多くの量が見出され、11世紀には姿を消し始める。実際のところ、アンダルシア地域ではヒジュラ暦411年／西暦1021年以後、ファーティマ朝銀貨は見出されない。地中海沿岸ではもう少し維持されたが、そこでもアル=ザーヒルの治世末期、ヒジュラ暦427年／西暦1036年に姿を消した。

アンダルスの領域で最も多く見られる貨幣は、11世紀の第1三半期に造幣された貨幣である。このため、この時期がファーティマ朝貨幣が最も流入した時期であると考えられる。銀貨にせよ金貨にせよ、貨幣の流入は多かった。後者は、ターイファ諸国のものより質が良く、ターイファ諸国の経済により適合した、多様なディーナールの形態〔1/2ディーナールや1/4ディーナール、1/8ディーナールに切られた形〕をとっていた。反対に銀貨は、ターイファ諸国がそれなりに安定した貨幣発行を始めると、流入しなくなった。貨幣の流入は11世紀の末に終わった。ムラービト朝の貨幣を含む発見貨群は事実上存在しないのである。アル=ムスタンスィル〔1036-1094年〕は、アンダルスの発見貨の中に貨幣が現れる最後のカリ

フである。銀貨は、彼の前任者であるアル=ザーヒルの時代には地中海地域に到来しなくなった。アンダルシアの領域ではそれはもっと早く、アル=ハーキムが発行した貨幣が、我々が知る最後の銀貨である。

さらに、ファーティマ朝の発見貨が存在する2大エリア、アンダルシア地域と沿岸地域には、他にも差異が存在する。前者では大規模な一括出土貨が見つかっており、そこには非常に多様な量のファーティマ朝貨幣が含まれている。金の埋蔵貨では、ファーティマ朝の貨幣が一括出土貨の半分に達しているが、銀の埋蔵貨では、通常10%を越えない。地中海沿岸地域では、孤立した発見貨や、一般に規模の点ではアンダルシアより控えめな一括出土貨などが見つまっている。ただし、ファーティマ朝の貨幣の割合は、金の場合是一般にアンダルシアより低い、銀の一括出土貨においては明らかにそれ以上である。

イベリア半島東南部の一括出土貨においてファーティマ朝の貨幣が相当な割合で存在していることに加え、最も古いファーティマ朝の貨幣や最も新しいファーティマ朝の貨幣が見つまっている——最初に到来し、最後に姿を消した——のがこの地方であることも指摘しなければなるまい。この事実、同地域がこの貨幣のイベリア半島への入り口であったことを示している。モイ Moll が述べているように、中継地としてのバレアレス諸島の役割も忘れてはなるまい。そこでの発見貨群は、[バレアレス諸島が]中継地であったことを示唆している。特にメノルカ島のミッチジョルン・グラン——現在のところ、圧倒的に多くの量のファーティマ朝の貨幣が見つまっている——はよく知られている。もう1つ [の有名な発見貨群] がアリカンテ海岸のベニドルムにあることも偶然ではない。

この中継地としての役割は、貨幣の出所からも示唆される。アル=アンダルスで発見されたファーティマ朝貨幣の多くの部分が、既知のファーティマ朝の造幣所の中でも、シチリアで作られていた。ここでも2つの金属

の間には違いがある。銀貨が基本的にアル=マンスリーヤに由来するのに
 対し、金貨の出所はより多様である。アル=マフディーヤ、アル=マン
 スリーヤ、アタラーブルス、ミスル Miṣr やシキリーヤ Ṣiqillīya [シチリア]
 などの金貨がある。シチリアの金貨が最も多く現れ、次に数が多いアル=
 マンスリーヤとはずっと差がある。シチリアの貨幣の多さ——特に 11 世
 紀に造幣された金貨——は、シチリアの造幣所が、ファーティマ朝の直接
 の支配下になかったにも関わらず、少なくともアル=ムスタンスィルの治
 世 [1036-1094 年] 全体を通じて、ファーティマ朝のために造幣を続けて
 いたことを示している。この事実には興味をそそられずにいられない。
 [※10 世紀半ば以降、ファーティマ朝の権威の下でシチリア島を差配して
 いた] カルブ朝のアミールたちは、常にファーティマ朝のカリフたちに忠
 実であったものの、彼らにシチリア島——1040 年から 1050 年にかけて、
 軍事的指導者たちに統治される独立した政治的単位への分裂という、アル=
 アンダルスで起きたと同様の状況にあった——へのより直接的な支配
 を回復させはしなかったからである (Bariani, 2001, p.72)。

アル=アンダルスへ到来した貨幣の種類は、多くは分割されたものであ
 った。金の場合は 1/4 ディーナール金貨、銀の場合はディルハム銀貨の断
 片、特に 1/2 ディルハムか 1/4 ディルハムで、1/4 ディルハムが最も数が
 多かった。1 ディルハム銀貨は最も少なく、既知の 1/8 ディルハム銀貨よ
 りも少ないほどである。これらの貨幣が被っている改変——基本的には切
 断や分割——のため、多くの場合、どの貨幣を扱っているか、貨幣の種類
 を定めることは困難であり、少なくともリスクがある。

ファーティマ朝の貨幣が、どのように、いつ、どこからアル=アンダル
 スに到来したかはわかる。しかし、なぜアル=アンダルスでファーティマ
 朝の貨幣が見つかるのかという問いは未解決のままである。この問いには
 既に幾つかの仮説が提示されている。デ=パウラ De Paula はサエンス

Sáenz の意見を取っている。彼によれば、アル=アンダルスに存在するファーティマ朝の貨幣は「コルドバの〔後ウマイヤ朝の〕軍隊によって、マグリブにおけるファーティマ朝の同盟者たちとの無数の戦いのいずれかの戦利品として、持ち帰られたもの」に違いないとされる (P. Sindreu, 1997, p.55)。しかし、現在の発見貨群に照らし合わせると、我々はこの解釈を退けざるを得ない。これらの戦いは、コルドバの初期のカリフたちの時代 [929年以降] に起きたものであり、それはまさに伝来する〔ファーティマ朝の〕貨幣が最も少ない時代だからである。発見貨群の年代は、もっとずっと後である。実際のところ、ファーティマ朝の貨幣がアル=アンダルスに最も多く入ってきたのは内戦の時期であり、マグリブへ侵入するのはとても不可能な時期であった。

おそらく、モイ (1997, p.43) が述べた、アル=アンダルスの側での銀への恒常的な需要が1つの最も直接的な理由であろう。しかしそれは、とりわけ11世紀における金の流入、銀より遥かに多く、おそらく異なる問題に対応した流れを説明していない。ファーティマ朝の金貨は、ターイファ諸国のそれより質が高かった。また、他国の貨幣を使うことに慣れていた諸国を流通するのにも問題は無かった。彼らにとってファーティマ朝のカリフは、後ウマイヤ朝のカリフたちにとってそうであったような、手強いライバルではなかった。より明白なのは、11世紀におけるファーティマ朝銀貨の消滅の理由である。カント Canto (2002, p.122) が述べているように、ターイファ時代におけるデイルハム貨の平価切り下げと、激しい平価切り下げを伴ったエジプトにおけるファーティマ朝の銀貨製造の大幅な減少は、大きく関係しているであろう。

つまり、アル=アンダルスにおけるファーティマ朝貨幣の存在は、何か1つの理由によるものではなく、各時期の歴史的問題に由来するものである。11世紀のアル=アンダルスは、相互に争う小国群に分断され、強力で

集権化された権力が全領土をコントロールしていた後ウマイヤ朝のカリフの時代とは全く異なっていた。それぞれの世紀のコンテクストは非常に異なる。そのため、包括的な解答を避け、それぞれの時期と場所に依じて、異なる解答を探すことが必要である。発見貨群の研究成果は、そうすることを要求している。

註

- 1) この論考は2つのプロジェクトの一環として作成された。スペインの科学イノベーション省の財政的支援によるプロジェクト PID 2019-108192 GB-I00 「道具としてのコンテクスト。初期中世における変容プロセスへの適用の諸段階」と、バレンシア自治州政府の財政的支援による PROMETEO/2019/035 「移行期の沿海部と山岳地帯。バレンシア自治州南部地域における社会変容の考古学」である。
- 2) 「ファーティマ朝の」という言葉が報告書のタイトルに初めて現れたのは1957年であり、国立考古学博物館が入手したコルドバの埋蔵物についての、ナバスケスが1957年と1958年の2度に渡って、「コルドバ・カリフ国とファーティマ朝の銀貨の埋蔵貨」というタイトルで発表した論文である。同じ著者がファーティマ朝の貨幣を含む他の一括出土貨についても発表している。トルヒーリョについて（1957年）、シウエラについて（1961年）、クルス=コンデについて（1963年）の論文である。
- 3) アル=アンダルスにおける外国貨幣については、2002年のカントの研究と、アル=アンダルスにおけるファーティマ朝貨幣の存在の問題を解明し、新しい発見貨幣群を示してくれる、複数の出版物を付け加えることが出来る。A. Canto 2004, A. Canto, F. Martín & C. Doménech 2017, A. Canto, I. Casas, T. Ibrahim & F. Martín 2005, C. Doménech 1991, 1992, 2002, 2003, 2004, 2006, 2013 & 2016.
- 4) メノルカ島のミッチジョルン=グランの埋蔵貨の事例 (Moll 1997) または——私たちが個人的に再検討する機会を持った——1930年に発行されたエルチェの一括出土貨の事例では、それまで知られていなかった、146ものファーティマ朝の貨幣の存在が明らかになった (C. Doménech 1993)。
- 5) 孤立した発見貨幣群のほとんどすべてが、シャルク=アル=アンダルス (イベリア半島東南岸) に由来する。というのも、既存の公的または私的なコレクションの大部分のイスラーム貨幣がこの地域で見出されたことが知られて

- いるからである (C. Doménech 2003 を参照)。この種の作業を他のエリア、例えばアンダルシアで行うことで、間違いなく、かなり多くのこれらの貨幣が見出されるであろう。そのため現状では、ファーティマ朝貨幣の孤立発見貨の地図は、状況をよく反映しているとは言えない。両方の地域が同様に研究されているわけではないからである。
- 6) アル=アンダルス全体を通じて、偶然に失われたファーティマ朝の金貨が現れた、唯一の発見貨が知られている。カリフのアル=マフディー (ヒジュラ暦 297-322 年 / 西暦 910-934 年) の名による 2 ディーナール金貨であり、コルドバの鉄道工事の際に見つかった (Canto 2002, p.118)。
 - 7) シーア派はアル=アンダルスでは栄えなかったが、イベリア半島におけるイスマール派布教の幾つかの試みが知られている。[9 世紀後半にイベリア半島南部で後ウマイヤ朝に反乱を起こした] イブン・ハフスーンは、ファーティマ朝に服従を誓い、彼の支配領域ではメスキータでの金曜日の礼拝の際に、アル=マフディーの名が唱えられたと伝えられる (Fierro, 2001, 171)。
 - 8) 穴開けというテーマについては、カントが 1990 年に著したサンタ=オラーリヤの発見貨についての論考で広範に扱われている。
 - 9) それぞれ、カリフのアル=ムイッズ、アル=ハーキムとアル=ザーヒルの発行した 3 枚の 1/4 ディーナール貨であり、それぞれ 2 回穴を開けられている。
 - 10) 小さな断片で構成された発見貨群の好例が、ロス=ロサーレス=トシーナの一括出土貨である。そこでは、1 点を除き、全ての断片が 2 グラム以下である。ファーティマ朝貨幣の 22 の断片に関しては、最小 0.09 グラム、最大 0.60 グラムの間で変動している。
 - 11) ミケル・バルセロは、この埋蔵貨に含まれていたアル=マンスールの貨幣 1 点に言及している (1984 年, 註 28)。しかし、何年も後で、モイが出版した (1997 年) この一括出土貨についての再検討では、この貨幣にはまったく言及されていない。存在しているのなら、このカリフが造幣してアル=アンダルスで現れた唯一の貨幣だったのだが、バルセロはこのアル=マンスールのものかもしれない貨幣の出所に言及しておらず、その一括出土貨は現在では保管されていないので、当該の貨幣が本当にアブ=ターヒル=イスマール=アル=マンスールのものなのか、または埋蔵貨においてその造幣活動が証明されているアル=ハーキム=アル=マンスールのものなのか、知ることは出来ない。これらのカリフたちの前者のものであれば、発見貨群の再検討についての報告書において明白な言及をする価値があったであろう (Moll, 1997)。
 - 12) ただし、まだ調査中の近年の発見貨群が、この断定を若干変化させる可能性

がある。

- 13) サンタ=オラーリヤの埋蔵貨のディルハム貨幣の中から、ムラービト朝のディーナール金貨が1枚見つかっているが、後から封入されたものであるように思われる。
- 14) これはディーナール金貨だが、銘文の状態が非常に悪く、そのため、キリスト教徒による模倣貨とも考えられている (Balaguer, 1990, pp.105-106)。しかし、もしこの貨幣がキリスト教徒の系譜に連なるものだったとしても、この一括出土貨におけるファーティマ朝貨幣の時間的広がりが非常に大きいことに変わりはない。965年から1101年である。
- 15) この一括出土貨は多くの研究文献で扱われてきたが、それについて我々が持っている情報は非常に部分的なものに留まっている。金貨はサエンス=ディエス (1990) によって検討され、このため我々はこの金属で造幣された1枚だけのファーティマ朝貨幣の存在を知ることができる。しかし、銀貨については、ナバスケスによって1961年に出された、ヒジュラ暦297年から567年にかけて5枚のファーティマ朝貨幣の存在に言及した情報しか無い。12世紀のファーティマ朝貨幣の存在は普通ではないため、これらの日付については用心して扱った方が良いでしょう。
- 16) バレンシア市のサンタ=エレナの発見貨は、いまだに詳細に研究されていない。全般的な進展についてはカント他の2005年の文献を、ファーティマ朝の貨幣についてはカント、マルティン、ドメネクの2017年の文献を参照されたい。
- 17) 2000枚近いファーティマ朝の貨幣を含む、グアダルキビル河の埋蔵貨と、同じく109枚を含むクルス=コンデの埋蔵貨を指している。どちらの場合も、ファーティマ朝の貨幣は一括出土貨全体の約半分を占めていると想定される。
- 18) 例えば、ムナスティル・ダ・カンブの事例で残留した貨幣として現れている。
- 19) 註14を参照。彼の貨幣だと確認できれば、アル=アンダルスで現れた、このカリフの唯一の金貨ということになるだろう。
- 20) バルセロ (1984, 註28) は、ミッチジョルン=グランの埋蔵貨の一部であった、アル=マンスールの名が書かれた1枚の貨幣に言及している。しかし、モイが1997年に行ったこの一括出土貨の再調査では、その貨幣に言及されていない。もし存在すれば、アル=アンダルスで発見されたこのカリフの名を持つ唯一の銀貨になるのだが。金貨1枚だけがこのカリフのものとして置かれているが、それも非常に疑わしい (註12を参照)。現在、ミッチジョルン=グランの一括出土貨は保存されていないので、当該貨幣が本当にアブ=ター

ヒル=イスマーイール=アル=マンズールが造幣したものなのか、それともアル=ハーキム=アル=マンズールが造幣したものなのか——彼の貨幣群は、当該埋蔵貨の中で確認されている——、解明することは不可能である。前者の貨幣であるならば、この発見貨幣群についての調査報告書の中で言及するに値したであろうと思われる。

- 21) 元の論文の書誌情報を挙げておく。Carolina Doménech Belda, “Fatimies y taifas: la moneda de oro fatimí en al-Andalus”, *Al-Qantara*, 37-2 (2016), pp.199-232.

参考文献

- ・ Arroyo Ilera, R., “Descripción y análisis de las monedas árabes de Sinarcas (Valencia)”, *Actas del VII Congreso Nacional de Numismática*, Madrid, 1989, pp.467-479.
- ・ Azuar Ruiz, R., “Al-Andalus y el comercio mediterráneo del siglo XI, según la dispersión y distribución de las producciones cerámicas” *Codex Aquilensis*, 13 (1998), pp.51-78.
- ・ Azuar Ruiz, R., *Los bronzes islámicos de Denta (s. V HG/XI d. C.)*, Alicante, 2012, Serie Mayor, p.10.
- ・ Balaguer Prunes, A. Ma., “Troballes i circulació monetària: corpus de les troballes de moneda àrab a Catalunya (segles VIII-XIII)”, *Acta Numismática*, 20 (1992), pp.83-109.
- ・ Balog, P., “History of the dirhem in Egypt from the fatimid cinquest until the collapse of the mamluk empire 358-922 H./968-1517 D.”, *Revue Numismatique*, III (1961), pp.109-149.
- ・ Bariani, L., “El Islam en Sicilia”, *El Esplendor de los Omeyas Cordobeses*, Sevilla, 2001, pp.68-73.
- ・ BarcelóA Perelló, M., “Alguns problemes d’història agrària mallorquina suggerits pel text d’Al Zhuri”, *Sobre Mayurqa*, Palma de Mallorca 1984, pp.35-53.
- ・ Bofarull i Comenge, A., “Trobada de monedes àrabs en Lorca”, *Acta Numismática*, 15 (1985), pp.183-185.
- ・ Canto, A., “Un hallazgo de moneda hispanoárabe de la colección Santa Olalla”, *Cuadernos de Prehistoria y Arqueología de la Universidad Autónoma de Madrid*, 17 (1990), pp.315-329.
- ・ Canto, A., “Hallazgos monetarios en el periodo taifa”, *Gaceta Numismática*, 105-106 (1992), pp.25-42.
- ・ CANTO, A., “La moneda”, *Los reinos de Taifas: Historia de España dirigida por R. Menéndez Pidal*, VIII-1., Madrid, 1994, pp.275-297.

- Canto, A. "Moneda foránea en al-Andalus", *Actas del X Congreso Nacional de Numismática 1998*, Albacete, 2002, pp.107-128.
- Canto, A., "Tesoro de la calle San Pedro (Murcia)", *Tesoros. Materia, ley y forma, catálogo de exposición*, Murcia, 2014, p.63.
- Canto, A. & Martín, F., "El hallazgo de Belalcázar (Córdoba) : Nuevas aportaciones" *Qurṭuba*, 5 (2000), pp.27-40.
- Canto, A., Casas, I., Ibrahim, T. & Martín, F., "El tesoro de época islámica de la calle Santa Elena (Valencia)", *Tesoros Monetarios de Valencia y su entorno*, Valencia, 2005, pp.177-196.
- Canto, A., Martín, F. & Doménech Belda, C., "Monedas fatimíes en el hallazgo de dinares de la calle Santa Elena (Valencia, España)", *Proceedings of the XV International Numismatic Congress, Taormina 2015*, edited by M. Caccamo Caltabiano, Roma, 2017, pp.1083-1088.
- Cardito, L., Martínez, C. & Sevilla, C., "Un hallazgo de moneda islámica en Baena (Córdoba)", *II Jarique de Numismática Hispano-Árabe*, Lleida, 1990, pp.287-296.
- Codera y Zaidin, F., "Tesoro de monedas árabes descubierto en Belalcázar", *Boletín de la Real Academia de la Historia*, XXXI (1897), pp.449-457.
- Dachraoui, T., *Le califat fatimi du Magreb 296-362/909-973*, Túnez, 1981.
- Delgado y Hernández, A., "Clasificación de las ciento setenta y tres monedas de plata árabes encontradas en Consuegra", *Memorial Histórico español*, tomo I, Madrid, 1850, pp.LV-LVI.
- Doménech Belda, C., *El hallazgo de dirhames califales de Almoradí (Alacant)*, Valencia, 1991.
- Doménech Belda, C., "Revisión de un hallazgo de monedas árabes de Elche (Alicante)", *Actas del III Jarique de Estudios Numismáticos Hispano-Arabes*, Madrid, 1992, pp.231-242.
- Doménech Belda, C., "El numerario fatimí en el šarq al-Andalus" *Actas del X Congreso Nacional de Numismática 1998*, Albacete, 2002, p.48
- Doménech Belda, C., *Dinares, dirhames y feluses. Circulación monetaria islámica en el País Valenciano*, Alicante, 2003.
- Doménech Belda, C., "La moneda fatimí y su relación con al-Andalus", *IV Jornadas de Madinat al-Zahra : Cuadernos de Madinat al-Zahra*, V (2004), pp.339-354.
- Doménech Belda, C., "El tesorillo islámico de Begastrí", *Antigüedad y Cristianismo*, XXIII (2006), pp.211-249.
- Doménech Belda, C., "Tesorillo islámico de la calle Jabonerías de Murcia", *Tudmir*, 3 (2013), pp.8-24.

- ・ Doménech Belda, C., “Fatimíes y Taifas : la moneda de oro fatimí en al-Andalus”, *Al-Qantara*, 37-2 (2016), CSIC, pp.199-232.
- ・ Duplessy, J., “La circulation des monnaies orientales arabes en l’Europe Occidentale du VIIIe au XIII e siècle”, *Revue Numismatique*, 5 as., XVIII (1956), p.128.
- ・ Fierro Bello, I., “Espacio sunní y espacio šī`ī”, *El Esplendor de los Omeyas Cordobeses*, Sevilla, 2001, pp.168-177.
- ・ Fontenla Ballesta, S., “Un tesorillo de plata medieval del Tíjān (Turre, Almería)”, *Axarquía*, 3 (1998), pp.77-81.
- ・ Fontenla Ballesta, S., “Un tesorillo de monedas de época de taifas procedente de Río Alcaide (Vélez Blanco, Almería)”, *Alberca*, 3 (2005), pp.135-146.
- ・ Guichard, P., “Omeyyades et fatimides au Maghreb. Problématique d’un conflit politico-idéologique (vers 929-vers 980)”, *L’Egypte fatimide. Son art et son histoire*, París, 1999, pp.55-68.
- ・ Guichard, P., *L’Espagne et la Sicile musulmanes aux XI et XII siècles*, Lyon, 2000.
- ・ Hazard, H. W., *The Numismatic History of Late Medieval North Africa*, New York, 1952.
- ・ Lafuente Vidal, J., “El tesoro de monedas árabes de Elche”, *Boletín de la Real Academia de la Historia*, XCVI (1928), pp.846-856.
- ・ Lane-Poole, S., *Catalogue of Oriental Coins in the British Museum*, London, 1875-1890.
- ・ Lavoix, H., *Catalogue des monnaies musulmanes de la Bibliothèque Nationale. Égypte et Syrie*, París, 1896.
- ・ Lirola Delgado, J., *El poder naval de al-Andalus en la época del Califato Omeya*, Granada, 1993.
- ・ Llorens, M. M., Ripolles, P. P. & Doménech, C., *Monedes d’ahir, tresors d’avui*, Valencia, 1997.
- ・ Marcos Pous, A. & Vicent Zaragoza, A. M^a., “Los tesorillos de moneda hispano-árabe del Museo Arqueológico de Córdoba”, *III Jarique de Numismática Hispano-Árabe*, 1993, pp.183-217.
- ・ Martínez Salvador, C., “Moneda fatimí en hallazgos peninsulares”, *Gaceta Numismática*, 97-98 (1990), p.135-141.
- ・ Martínez, A., “El tesoro califal de Los Villares (Caudete, Valencia)” *Acta Numismática*, 17-18 (1987-88), pp.135-141.
- ・ Mateu i Llopis, F., “Hallazgos Numismáticos Musulmanes”, *Al-Andalus*, XIV-XXI (1949-1956). [8年間に渡って同一雑誌に掲載された同一シリーズの論文。ページ数は省略されている]

- ・ Mateu i Llopis, F., “Hallazgos Monetarios IV”, *Ampurias*, VII-VIII (1946), pp.254-276.
- ・ Miles G. C., *Fatimid Coins*, New York, 1951.
- ・ Moll i Mercadal, B., “Contribució a l’estudi de la circulació monetaria a la Menorca musulmana”, *Meloussa*, 3 (1994), pp.25-68. (*Acta Numismática*, 26 (1996), pp.81-138. にも所収)
- ・ Moll i Mercadal, B., “Revisió d’una vella troballa : el tresoret fatimita d’es Migjorn Gran (Menorca)”, *Acta Numismática*, 27 (1997), pp.43-52.
- ・ Mora Serrano, B., *Estudio de moneda Hammūdi en Málaga. El hallazgo de dirhames de Ardales*, Málaga, 1993.
- ・ Navascués J. M. de, “Tesorillo de monedas de plata del califato cordobés y fatimies”, *Memorias de los Museos Arqueológicos Provinciales 1955-1957*, XVI-XVIII (1957), pp.112-114. (*Numario Hispánico*, VII (1958), pp.207-210. にも所収)
- ・ Navascués J. M. de, “Tesoro árabe de la calle de Cruz Conde. Córdoba”, *Numario Hispánico*, X (1961), pp.170-172. (*Memoria de los Museos Arqueológicos Provinciales 1958-1961*, 1963, pp.79-80. にも所収)
- ・ Navascués J. M. de, “El tesoro de Cihuela” *Numario Hispánico*, X (1961), pp.173-175.
- ・ Navascués J. M. de, “Tesoro de Cihuela (Soria)”, *Memorias de los Museos Arqueológicos Provinciales 1958-1961*, Madrid, 1963, pp.81-83.
- ・ Navascués J. M. de, “Tesoro hispano-árabe hallado en Trujillo (Cáceres)”, *Numario Hispánico*, VI (1957), pp.5-28.
- ・ Pellicer i Bru, J., “El tresoret de moneda àrab LR-P dels anys 331-418 a.H. ”, *Acta Numismática*, 15 (1985), pp.157-181.
- ・ Pellicer i Bru, J., “Un tesoro de dirhems àrabs a SC-J”, *Acta Numismática*, 12 (1982), pp.139-165.
- ・ Pérez Sindreu, F.de P., “Tesorillo de moneda islámica en Los Rosales-Tocina (Sevilla)”, *Acta Numismática* 27, 1997, 53-66.
- ・ Prieto Vives, A., “Hallazgo de monedas hispano-musulmanas”, *Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos*, XXXI (1914), pp.362-377.
- ・ Prieto Vives, A., “Nuevo hallazgo de monedas hispano musulmanas” *Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos*, 32 (1915), pp.1-30.
- ・ Prieto Vives, A., “Tesoro de monedas musulmanas encontrado en Badajoz”, *Al-Andalus*, 2-2 (1934), pp.299-328.
- ・ Retamero i Serralvo, F., “Moneda i monedes àrabs a l’illa d’Eivissa”, *Treballs del*

Museu Arqueològic d'Eivissa i Formentera, 34 (1995), pp.1-66.

- ・Ruiz Asensio, J. M., “Un tesoro de dirhams califales hallado en Jaén”, *Boletín del Instituto de Estudios Giennenses*, 32 (1962), pp.109-134.
- ・Sáenz-Diez, J. I., “Dos hallazgos hispano-árabes en museos nacionales : “Cruz Conde” (Arqueológico Nacional) y Haza del Carmen (Arqueológico de Córdoba)”, *Gaceta Numismática*, 74-75 (1984), pp.147-152.
- ・Sáenz-Diez, J. I., “El hallazgo numismático hispano-árabe de Cihuela (Soria)”, *Soria Arqueológica*, 1 (1991), pp.231-244.
- ・Santos Jener, S. de los, “Monedas carolingias en un tesoro de dirhems del emirato cordobés”, *Numario Hispánico*, V (1956), pp.79-87.
- ・Vicent i Cavaller, J., “Troballes monetaries : La Val d’Uixò, La Vilavella, Nules”, *Cuadernos de Prehistoria y Arqueología Castellonenses*, 6 (1979), pp.299-305.
- ・Viguera Molins, M. J., “Los Fāṭimīes de Ifrīqiya en el *kitāb al-ulla* de Ibn al-Abbār de Valencia”, *Sharq Al-Andalus*, 2 (1985), pp.29-37.

[解題]

本論文の著者カロリーナ・ドメネク=ベルダ Carolina Doméneq Belda は、スペインのアリカンテ大学教授であり、イスラーム=スペイン期の貨幣、特に後ウマイヤ朝の貨幣とファーティマ朝の貨幣の研究について、スペイン学界を牽引する貨幣史研究者である。本論文「アル=アンダルスとファーティマ朝：貨幣学による証言」Al-Andalus y los Fatimíes : Los testimonios numismáticos” は、彼女が4年前にスペインのイスラーム=スペイン史を専門とした学術雑誌アル=カンターラ誌に掲載した論文「ファーティマ朝とターイファ諸国。アル=アンダルスにおけるファーティマ朝金貨」に、ドメネク自身が新たなデータと考察を加え、2020年に加筆修正したものである²¹⁾。

文字史料が豊富とは言えないイスラーム=スペインの歴史研究において、貨幣(やその出土状況)は貴重な史料であり、特に文字史料に残りにくい当時の経済活動についても多くの手がかりを与えてくれる。後ウマイヤ朝とファーティマ朝は、共に10世紀にカリフを名乗り、また、サハラ交易を巡ってマグリブ(北西アフリカ)で軍事衝突するなど、政治や経済において競合する面も見られた。その一方で、両者の間には密接な交流や結び付きも存在していた。10世紀に最盛期を迎えた後ウマイヤ朝が11世紀初頭に分裂し、イスラーム・スペインは1031年以降、第1次小王国(ターイファ)時代に入る。その後、12世紀初頭にムービト朝がイスラーム・スペインを統一するが、この激しい変化の中で、イスラーム・スペインとファーティマ朝の関係はどのように推移していったのか。本論文は貨幣を手掛かりにその実情の一端に迫っている。具体的には、かつての後ウマ

イヤ朝の版図において発見されたファーティマ朝貨幣を、地理的分布や時期的な変動、また貨幣の状態や一緒に埋められていた貨幣などから多角的に分析することで、両者の間に存在していた交流や、その時期的変動、またその背景に存在していた政治的・経済的状況に迫っており、文字史料による情報が乏しい11世紀までの西地中海の状況について、新たな知見を与えてくれる、貴重な論考となっている。